

Q₆

点滴中に注意することはありますか？

抗がん剤治療の場合には、漏れにくい太い血管を、確実に確保して注意深く注射、点滴するのが基本です。点滴中には、点滴液が、確実に注射されているかどうか、気をつけましょう。

点滴中は、点滴ラインが確保されている（針が刺されている）手や足は、なるべく動かさないように安静にすることが大切です。そのためには、点滴が始まる前に、安静が保てる姿勢であるかどうかにも注意してください。

さらに、もし、点滴液の滴下スピードが遅くなったり、停止した場合には速やかに看護師に伝えてください。また、点滴中に、いつもとは違う痛みなどを自覚した場合も同様です。

しかし、点滴の種類によっては、血管に対する刺激がありますので、点滴が漏れていなくても、血管痛を自覚する場合があります。血管痛があることが、必ずしも点滴が漏れていることではありません。また、抗がん剤が漏れたとしても必ずしも皮膚潰瘍などの重篤な障害を起こすわけではありませんので、あわてずに、適切な処置を受けましょう。抗がん剤の点滴漏れの場合、その種類によって障害が出

現する時期、持続する期間が異なります。急性期（はじめの時期）に障害がないように見えても1～2週間後に皮膚障害が出現することもあり、注意が必要です。

また、抗がん剤によっては過敏症（じんま疹、搔痒感^{そうよう}、発熱、アナフィラキシー様ショックなど）をおこすことがあります。臨床試験の段階で高頻度に過敏症が出現した薬剤については、重篤な過敏症の発症予防のためにあらかじめ前投薬（副腎皮質ステロイド、抗ヒスタミン薬、解熱鎮痛剤など）をおこなうようにされています。

特に分子標的薬と呼ばれる抗がん剤の中には、特徴的なアレルギー反応である「インフュージョン・リアクション」をおこしやすいもの（トラスツズマブ、リツキシマブなど）があります。インフュージョン・リアクションとは、抗がん剤投与中から24時間以内に発熱、悪寒、吐き気、頭痛、関節痛、発疹などをおこす反応で、通常は軽微～中等度の症状ですが、アナフィラキシー様ショックなどの重篤な症状を引き起こすこともあります。点滴中に異常を感じたら、躊躇することなく速やかに看護師や医師に伝えることが大切です。（増口信一）